

壱岐と対馬の旅 2020



2020年10月

旅のチカラ研究所 植木圭二

長崎県の壱岐と対馬に妻と行ってきた。どちらも有名な島だが行ったことのある人は意外に少ない。私たちが初めて訪問した島で、良い思い出になったので紹介したい。

■あなたは特別

私も妻も壱岐そして対馬には行ったことがなかった。しかし歴史の島、国境の島というイメージで、以前から機会があれば行きたいと興味を持っていた。

7月頃、まだGoToトラベルキャンペーン（以下GOTO）が始まる前に「壱岐・対馬巡り3日間5万円」というパックツアーの募集があり、私はこの内容で5万円ならば安いと直感的に思った。しかし私は国内旅行でパックツアーを使うことが滅多にないので、申し込みを少しだけ躊躇したのでツアーは直ぐに満席になりキャンセル待ちをすることになった。

しばらくして旅行会社から連絡があり、キャンセル待ちをしているお客が50人以上もいるので特別に旅行を企画するという。その頃ちょうどGOTOが始まったことで、割引を見越してほぼ同じ内容なのに旅行費用は8万7千円に値上がっている。完全に便乗値上げだが、ただキャンセル待ちのお客はそれよりも1万円安くしてGOTOの割引により、結果としては当初の5万円よりもわずかに安くなる。

旅行会社も抜け目がない。キャンセル待ちをするお客は明らかに旅行に行く意思があり、その人たちに目を付けた。さらに1万円安くして「あなたは特別ですよ」という日本人の弱いところを突いてきた。そんな策略を知りながらも私たちは参加を決めた。

■福岡に到着

福岡空港に降り立ったツアー客は全部で38人、私たち夫婦と同年代のカップルが多く、女性の2人旅、1人旅もいる。比較的若い40代くらいの人も目につく。

空港で待っていた現地添乗員からGOTOの地域クーポン券22枚、つまり22000円分を受け取った。10月からGOTOを利用するとこのクーポンが旅行費用の15%分もらえるようになった。ただ旅行期間中に旅行先の県とその隣県でしか利用できない。宿泊費や交通費という基本的な費用はパックツアーの料金に入っているの、土産物や飲み物などで使い切らないといけない。これが結構大変だということが後になって知ることになる。

壱岐には船で渡るので空港から港までタクシー移動で、密を避けるため2人ずつの乗車になる。私は国内パックツアーの経験が乏しいので、このようなタクシー移動が一般的なのか分からない。タクシーは予約貸し切りなので料金メーターは回っていない。運転手に聞くとこの距離を普通に乗ったら2000円位だという。

■壱岐の初日

博多港から壱岐までは高速船で約1時間、私たちは島の南にある郷ノ浦港に着いた。観光バスが待っていて、バスに乗り込むと地元のベテランバスガイドが歓迎してくれた。

壱岐で最初の名所「猿岩」にやって来る。猿が横を向いているように見える大きな岩が海岸淵の崖の上にある。確かに猿に良く似ている。その岩に向かって皆一斉に写真を撮っている。

私は横ではなく正面から見たくて、回りこんで猿岩を見に行くと、何の変哲もない岩になった。物事は見方によってこうも変わるのかということ猿、いや岩に教えてもらった。

ここでハプニングだ。同じツアーのかなり年配の男性客がよろけてつまずき、そして倒れた。周囲の人が駆け寄って「どこを打ったの？頭じゃない？」と声を掛けている。男性は大丈夫と言いながらも反応が鈍い。奥さんと思われる人はオロオロするばかりだ。それでもしばらくして立ち上がった。足はおぼつかないが、何とかかなりそうだ。

最初の観光からハプニングで添乗員は血相を変えて飛んできた。高齢者も多い国内のパックツアーではこういうこともあるのだろう。

猿岩の直ぐ近くに「黒崎砲台跡」がある。大砲は撤去されて直径約10m、深さ約10mのコンクリートの巨大な穴があいている。在りし日の砲台には砲身の長さ18mの41cm砲が備えられていた。砲弾の直径は41cm、重さ約1トンもあり東洋一の巨大な砲台だ。その砲弾は35kmも届くというから狭い対馬海峡においては重要な砲台だったに違いない。しかし実戦では使われずに終戦を迎えた。一度だけ試射したら近所の民家の窓ガラスが割れたという逸話が残っている。

この砲は戦艦赤城に装備されていたものを取り外したという。そういえば赤城は戦艦から空母に変更されたので、取り外した主砲をここに持ってきたことになる。その話を聞いて私の頭をよぎったのは戦艦大和の主砲の45cm砲だ。これよりも凄いものを9門も積んでいたことになる。大和は凄いということは頭では分かっていたが、こんなものを実際に見るとその凄さを実感する。



<猿岩>



<黒崎砲台跡>

■壱岐の宿

本日の宿の国民宿舎「壱岐島荘」に到着する。湯の本湾に面した高台にある眺望の良い宿で、温泉も湧いている。



<壱岐島荘からの湯の本湾の眺望>

バスガイドが盛んにこの温泉を褒めていたので、部屋に入って荷物を置くと私は直ぐに大浴場に直行した。

泉質は先日浸かってきた有馬温泉に似ている。濃い茶褐色、温泉の濃度が高い“高張性”で、そしてしょっぱい。海辺の温泉なので海水がしみ込んでいるのだろう。

源泉の湧出温度は 68℃で、それが定期的に注ぎ口から出るからかなりワイルドな感じがする。壱岐に来て有馬の湯に似ている良い温泉を味わえるとは思わなかった。

風呂の窓からは湯の本湾が一望でき、小さな島影など壱岐の海を眺めながらの入浴になった。

待ちに待った夕食はシンプルながら十分な内容になっている。陶板焼きの肉は壱岐牛というから私にとっては初めてのものになる。壱岐牛は関東では流通していないが柔らかくて美味しい。

刺身はもちろん地元で獲れた平須（東京ではヒラマサ）、鯛、ハガツオが出てきた。極めつけはウニ飯で、ウニの産地ならではのものだ。もちろんこれも美味しい。

周りのツアー客たちを見ると、地元の珍味や飲み物をたくさん追加注文している。何といても壱岐は麦焼酎発祥の地なので 7 種の麦焼酎の飲み比べセットが人気になっている。私が真っ先に風呂に入っていた時にロビーではそれら焼酎の試飲をやっており、一部の呑兵衛のお客が堪能していた。

それにしてもこの羽振りの良さはどうしてかと考えると、空港でもらった GOTO の地域クーポンがその理由らしい。この宿では夕食時に追加注文する料理や飲み物、そしてロビーで買う土産物はそのクーポンを使うことができる。夫婦で 22000 円は使い手がありそうだ。

■歴史の島、神々の島

旅の2日目は壱岐の歴史文化に触れることになる。

バスガイドの説明によると壱岐は南北約17km、東西約15km、最高標高は200mということでなだらかで平地が多い女性的な島である。島の形はちょうど柏の葉のようで、入り組んだ形をしている。4つの町が2004年に合併して壱岐市になり、現在の人口は約2万6千人だという。

そんな小さな島なのに小学校が18校もあるという説明に「エー！」と車内からはどよめきが聞こえる。少子化が進む島なのに小学校の統廃合が進まない理由は、この島は平地や入り江が多く万遍無く人が住んでいるということらしい。確かに柏の葉なので入江だけでも10くらいはある。さらに内陸も平地なので至る所に集落がある。

対馬海流によって近海は魚が多く、入江も多いから海産物も良く獲れる。一見して住みやすい島というのが分かる。

そんな自然条件に加えて地理的には日本から朝鮮半島に渡る玄関口の島なので早くから栄え、人々が住み着いたのだろう。そのためこの島は様々なキャッチコピーが付いている。「歴史の島」、「神々の島」、「魏志倭人伝の島」と呼ばれ、遺跡や神社が非常に多い。

「月読神社」という小さな神社に案内される。小高い丘の上にある社（やしろ）と言った方がよさそうな小さな神社だが、この神社が壱岐最古の神社で、日本の神道発祥の神社だという。

海岸にある景勝地「左京鼻」にやって来る。約1km続く断崖絶壁の景勝地だが、どこにでもある風景で私にとってはあまり感激がない。海岸に突き出た部分に社がある。バスガイドの話ではこのくらいの規模の社を含めるとこの島にはおよそ1000の神社があるという。

神社ではないが、左京鼻の近くには「はらほげ地蔵」という6体の地蔵が海に浸かっている。バスガイドの説明では地蔵の腹の部分が丸くえぐられていることから付けられた名前前で、“ほげ”は“掘る”だと言う。地蔵の首にはポーチのようなものが掛けてあり、潮が引くと地蔵まで歩いて行けるのでポーチに賽銭を入れる。この地は神だけでなく仏にも手厚い。



<月読神社>



<はらほげ地蔵>

「一支国復元公園」という弥生時代の遺跡にやって来た。遺構から当時の建物を復元した公園で、日本三大弥生遺跡だとバスガイドが教えてくれた。私は他の2つの吉野ヶ里遺跡と登呂遺跡は訪れたこともあるが、この遺跡の名は初めて聞く。

一支国（いきこく）は壱岐の語源で中国の歴史書でも出てくる。有名な魏志倭人伝でもこの島のことが触れられており、この公園は島の政治の中心だったという。

この島は忙しいパッキングツアーではなく、個人的にのんびりと回りたくなってきた。

そんな気持ちになってきたのに、もう壱岐とはお別れになる。

郷ノ浦港からフェリーに乗る前に各自自由に昼食をとることになっている。ただこの境界は地元の人たちが飲み食いする店がほとんどなので GOTO の地域クーポンを扱っている食事処はなかった。2 時間の航海は暇なので船内でビール片手に昼食をとることにして、地域クーポンが使える土産物屋で弁当とビールを買い込んで乗船した。

しかしこの判断が後になって後悔することになる。ちなみに妻は昼飯を抜いた。

■国境の島

フェリーは対馬に到着した。最初に感じたのは実にハングル文字が多いことで、韓国の島かと勘違いしそうだ。「国境の島」と呼ばれる理由がこの景色から分かる。

観光バスは待っておらず、私たちは添乗員の案内で港から 15 分程歩いて「万松院」という寺にやって来た。この寺は対馬藩を代々治めた宗（そう）家の菩提寺で、私たちが着くのを待っていたかのように住職が現れた。

私が愛読している井沢元彦の「逆説の日本史」によれば、宗氏は豊臣秀吉と朝鮮国との間に入って二枚舌外交を展開した。

秀吉は唐（から）つまり中国、当時の「明」を征服しようとして、そこまでの道を朝鮮国に案内をさせようと考えた。それゆえ“唐入り”と呼ばれている。秀吉はそのことを朝鮮国に伝えるように宗氏に命じた。それは今考えると無茶な話だが、そもそも朝鮮国は日本の言うことは何でも聞くというような情報を秀吉に流していたのは宗氏で、それは宗氏の存在感を誇示するためにそう振舞っていたのだろう。しかし宗氏はこの秀吉の命令は絶対に不可能なことだと百も承知していた。朝鮮国は明の属国のような国なので親分を裏切るなど絶対にありえない。そのため宗氏はどちらにも本当のことを言えず、双方に都合の良い嘘をついた。秀吉には太閤殿下の御威光だから大丈夫ですよと言い、朝鮮国には表敬訪問に行くくらいの話をしていたに違いない。

しかし本当に唐入りが始まってしまった。全く予想していなかった朝鮮国は退却するのみだったが、明に援軍を頼み形勢が逆転した。補給も絶たれ、秀吉の死によって唐入りは終わった。

宗氏が最初から本当のことを言っていれば、全く違う展開になっていただろう。

さて住職の話は、その秀吉には一切触れることなく後に江戸幕府を開き朝鮮国と交易を進めた徳川家との交流について説明が始まる。

この寺には珍しいものがあると紹介してくれたのが、徳川歴代将軍の位牌だ。徳川家の位牌と言えは愛知県岡崎市にある徳川家菩提寺の大樹寺だが、万松院のものはそのレプリカだという。朝鮮の特使が江戸や岡崎に行かなくても位牌を拝めるように作ったという。大樹寺の位牌は将軍が亡くなった時の身長と同じ高さと言われており、ここにある位牌もまちまちの高さをしていた。

朝鮮の特使が持ってきた朝鮮国王から贈られた三具足が堂内に展示してある。もちろん本物で日本国内にはほとんど残っていない珍しいものだという。

境内にオブジェのように古い小さな太鼓が柵に囲まれて立っている。かなり古くて腐食しており一見しては太鼓には見えなかった。

住職の話では、これが「閑古鳥が鳴く」の語源になった諫鼓(かんこ) だという。中国の故事で、諫鼓とは君主に不満や言いたいことがあるもの者が打ち鳴らすために設けた太鼓だという。

宗家の治世が良かったのでこの諫鼓を鳴らさずに済んだために小鳥が諫鼓に乗って鳴いている様を称して「諫鼓 鳥が鳴く」から「閑古鳥が鳴く」になった。つまり平和で何事もないことを意味し、決して暇を持て余して閑散とした様子ではない。



<諫鼓>

歴代対馬藩主の墓が裏山にあるという。石段を 160 段ほど登ると巨大な墓が並んでおり、その規模は大大名なみで、金沢の前田藩墓地、萩の毛利藩墓地とともに日本三大墓所と言われている。大きな杉の木が何本もあり看板には万松院創建よりも古いと書かれている。墓所の背後には見事な石垣が組まれている。

この墓所を見る限り当時の宗家の隆盛が伝わってくる。朝鮮や中国との交易で相当に儲けていたに違いない。

■対馬の宿

本日の宿はビジネスホテルの東横インだ。対馬で一番高いという 14 階建てで、まだ新しい。東横インは日本国内だけでなく最近では韓国を中心にヨーロッパまで進出をしている。その東横インが対馬にできたのは韓国からのお客がターゲットだが、今は新型コロナウイルス感染症の影響で韓国からのお客はいない。そのゆえ日本人だけだが、かなり多くのお客が次から次へとチェックインしている。私たち以外にも別の旅行会社のツアー客も来ている。

パックツアーで東横インを使うのかと私は少々驚いているが、ツアー客は 2 人組がほとんどで 1 人旅もいるので個室の方が都合よく、高齢者もいるからむしろベッドの方がいいのだろう。

夕食は近くの旅館「万松閣」で食べることになっている。その万松閣から若いお兄さんが迎えに来ており、短い時間だったが地元の人と話をすることができた。

東横インに泊まって食事だけ旅館で食べるという持ちつ持たれつの関係は最近多くなってきていると言う。むしろ一般的な外国人は日本式の旅館よりもビジネスホテルの方を好むので三者にメリットがある。海外旅行ではホテルではなく、外の地元レストランで食事するのは当たり前だから、さすが国境の島だ。

■対馬の名物料理

旅館に入って、料理が並んだテーブルを見てお客たちは「ウオー！」と歓声を発した。

それは対馬の名物料理「石焼き」で、テーブルにはガスコンロが置かれ、その上には表面を平らにした縦横 30cm 程、厚さ 10cm 程の石が乗っている。この石の上で海鮮や野菜を豪快に焼くので石焼きと呼んでいる。具材は穴子、平須、鯛、イカ、エビ、貝、カボチャ、人参、キャベツ、玉ネギ、ピーマン、椎茸、茄子、どれも大きい。

島はどこに行っても自給自足が基本なので獲れたばかりの新鮮なものばかりが出される。私が島を好む理由の一つでもある。

1時間前から熱していたという石の上に油を敷いて具材を焼き始める。味付けはポン酢醤油か藻塩になるが、藻塩の方が私好みだ。藻塩はひじき、ほんだわらといった海草と一緒に炊き込んだ海塩なので潮の香りがして実に美味い。豪快な焼き方と新鮮な具材に藻塩では、味覚だけでなく視覚や嗅覚も刺激されてこれはたまらない。

石焼き以外にもたくさんの料理が出ている。この近海では穴子がよく獲れるので大きな穴子の天ぷらを筆頭に、刺身はサザエと平須と鯛、酢の物と海藻の小鉢、なぜか中華のエビチリまである。とても食べきれない量ではない。

極めつけはメの地元名物「ろくべえ汁」だ。そのためにカセットコンロが別に用意されている。きのこや野菜に鶏肉が入った醤油ベースの鍋はいたって普通だが、特徴はサツマイモの麺を入れることだ。仲居さんの話では麺は小麦粉など一切使っておらず 100 パーセントサツマイモだという。その麺だけを味見したが甘くない。私たちが普通に食べているサツマイモとは違うようだ。

最後にデザート柿がでてきた。私の胃袋はもはやパンパンで、その柿も入る隙間がない。それでも何とか食べきったが、明らかに作戦ミスだ。船で食べた弁当が余分だったと後悔する。昼食を抜いた妻は満足そうな顔をしている。



<右が石焼きの石、中央はその具材 左がろくべえ汁>

■自然豊かな対馬

3 日目はもう旅の最終日になる。せっかく国境の島に来たのに、もう帰るのは早い気がするがパッキングツアーでは致し方ない。

本日は半日だけが観光バスでの移動になり、新米らしき初々しいバスガイドが付いた。その彼女が覚えてたの文言を並べて、対馬を紹介してくれた。対馬は、沖縄本島や北方領土を除くと佐渡島、奄美大島に続く日本 3 番目の大きさの島で、南北約 82km、東西約 18km と細長い。最高峰は 649m で男性的な険しい島になっている。面積は壱岐の 5 倍以上あるのに人口は同じくらいで 3 万人と説明してくれた。

対馬は南北に 2 つの島に分かれていると私は思っていたが、彼女の説明を聞いて大きな思い違いをしていたことが判明した。この島は元々一つの島だったが、江戸時代初期に島の中央の入り江を少し延長させて大船越という運河を掘った。明治時代になり日本海軍は軍艦が通過できるように大船越とは別にさらに大きい運河を掘った。結局現在は人工的に 3 つの島に分かれている。

その運河に架かる 2 つの橋を渡って、私たちのバスは島の北の方に向かっている。

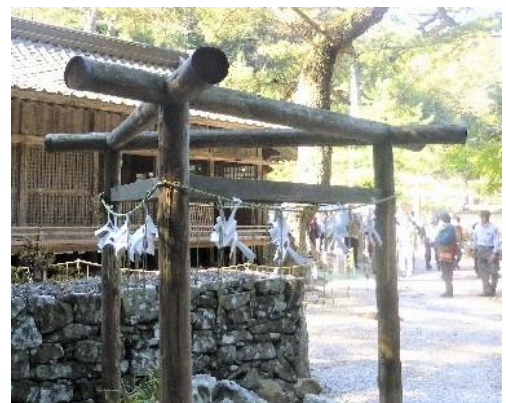
「山猫とび出し注意」の標識が目にとまる。この辺りは「対馬山猫」の生息地になっており時々飛び出してくるらしい。対馬山猫は絶滅危惧種で、国の天然記念物にも指定されている。だから対馬の飛行場の正式名称は「対馬やまねこ空港」になっている。

「和多都美神社」という浅茅湾（あそうわん）に面した神社にやって来た。この神社は鳥居が海に浸かって立っているので広島の大島神社を思い出させる。バスガイドの説明では 2 本の鳥居が海にあったが、先日の台風で先端の鳥居は崩れてしまったという。無残にも鳥居の残骸の一部が海面に突き出ている。

この神社にはさらに珍しい鳥居がある。通常の鳥居を 3 つ合わせたもので、上から見ると正三角形をした鳥居で、私が初めて見るものだ。さすがに対馬まで来ると珍しいものが多い。



<和多都美神社の海に建つ鳥居>



<三角形の鳥居>

この地に伝わる豊玉姫伝説をバスガイドが細かく紹介してくれた。それは浦島太郎と鶴の恩返しを合わせたような話で、鶴ではなく白蛇になっていた。それらの話の因果関係は分からないがルーツはきっと同じなのだろう。豊玉姫の墳墓が神社の裏手にあり、お参りをする。

和多都美神社から急な坂道をバスで登ると「烏帽子岳展望台」の駐車場に到着する。

この展望台からは浅茅湾を一望できる。バスガイドの話では浅茅湾には大小様々な島が 108 島もあり、それらを眼下に臨む絶景になっている。彼女は「日本三景の松島に似ているでしょう」とちょっと誇らしげに言っているが、口振りからして松島には行ったことがないようだ。

私が思うには上から見るので松島よりも絶景で、むしろ佐世保にある九十九島に似ている。しかし絶景が広がる視野角度は九十九島よりもこちらの方が広い。やはり 99 よりも 108の方が凄いのは自明の理だろう。

男性的で険しい対馬ならではのこの絶景はお勧めスポットだ。韓国まで約 49km ということで晴れた日には韓国が見えるというから、やはりここは国境の島だ。



< 烏帽子岳展望台から浅茅湾の眺望 逆光なのが残念 >

■旅の終わりに

短い半日バス観光が終わりになろうとしているが、多くのツアー客が土産物を買う場所に連れて行ってくれと添乗員に頼んでいる。GOTOの地域クーポンがまだ手元にあって使い切るためだ。空港に着く前に地域クーポンが使えるスーパーマーケットに立ち寄ることになり、皆いっせいに買い物に走る。私たちも走り、そして買い込んだが、それでも 6000 円分残った。

最後は空港で頑張っ使い切ったが、私のバッグは土産物でパンパンになってしまった。

駆け込みの買い物のドタバタを経験して分かったことは、GOTOの旅は地域クーポンをいかに上手く使うかだ。そして次回への教訓は土産物がたくさん入る大きなバッグを持って来ることだろう。

女性的な壱岐、男性的な対馬、どちらの島も私たちが満足させてくれた。歴史の島、神々の島、国境の島、その名前のおりの島は私たちの期待を裏切らなかった。

■5万円の旅は安いのか

冒頭にも書いたが、このツアーは当初 5 万円で募集しており、私は直感的に安いと思った。GOTOが始まると割引を見越してほぼ同じ内容で 8 万 7 千円になったが、自由主義経済なのでこれに文句をつけるつもりはない。旅行業界は自粛によって収入が激減し GOTO で稼がないと潰れてしまうから、それもあたりだろう。それに旅行者の払う費用は以前とあまり変わらない。

気を付けなくてはならないのは、キャンセル料が発生した場合は8万7千円に対してキャンセル料がかかるからことだ。このことは案外知られておらず、盲点になっている。

そして私は、自分が直感的に安いと思った5万円の旅を検証してみたくなった。

交通費は羽田→福岡がJALの最安値で9000円、福岡空港から港までタクシー2000円で1人当たり1000円、博多→壱岐の高速船が4620円、壱岐→対馬の2等フェリーが2000円、帰りの対馬→福岡→羽田の乗り継ぎ便はANAで20000円、以上の交通費の合計は36620円になる。

観光バスのチャーター料の日帰りの相場は10万円、38人で割ると2600円になる。

宿泊費は国民宿舎壱岐島荘のHPを調べるとスタンダード2人部屋で1人当たり8000円、東横インのツインルームが9120円なので1人当たり4560円、夕食の石焼きはパンフレットによると4500円位で、宿泊費は合わせて17000円ほどになる。

以上の合計は56220円になる。これは普通に利用した場合の費用なので、これに団体割引や大手旅行会社の継続的で包括的な割引が適用される。それを2割とすると原価は4万円台半ばで、ギリギリ5万円利益が出る。そう考えると5万円は安かったのだろう。

ついでに旅のチカラ研究所が個人旅行として企画したらどうなるのか。

JALやANAは高いので格安航空(LCC)を利用すると成田→福岡の片道が6000円、LCCは対馬便がないので往復利用で12000円、対馬→博多港の高速船7250円とタクシー1000円が追加され、結果として交通費は27870円になる。ただし成田までの交通費が発生する。

観光バスのチャーターは無理なのでタクシーを貸切るかレンタカーを借りる。旅のチカラ研究所と提携しているレンタカー会社ならば壱岐も対馬も24時間まで4000円、ガソリン代を入れても10000円程で、2人で乗れば1人当たり5000円になる。

以上の金額に宿泊費を加えると50780円になる。4人で行けばさらに3000円は安くなり、今ならばGOTOがあるので間違いなく4万円は切るだろう。

費用だけを考えると個人旅行でも同じくらいで行ける。どちらを選ぶかは旅に何を求めるかによって決まるだろう。わずらわしい手続きを避けて“おんぶに抱っこ”の旅を楽しむか、自分で旅を組み立てて自由に楽しみかは個人の考え方やその時の事情によるだろう。ただ、今回の私は旅行会社も含め業界全体を元気にするために、あえてパックスツアーを選んだ。

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合って各項目を5段階で評価し、委員会として評価値を算出する。

評価の基準は、5は驚き感動、4は普通に良い、3は可もなく不可もない、2は普通に悪い、そして1は失望落胆としている。

総合点(平均値)で5段階の75%、つまり3.75をオススメの目安としている。特に4.00を超えるには驚き感動が少なくとも1項目以上あるからオススメ度は高い。

国民宿舎壱岐島荘は、泉質 5、風呂 3、料理 4、コスパ 4、サービス 4、建物・部屋 3、立地環境 4、総合点 3.86 になった。

泉質は高張性ナトリウム-塩化物泉、pH は 6.4、湧出温度は 64.8℃となっている。

■旅の記録

実施は 2020 年 10 月 17 日（土）～19 日（月）の 3 日間、その行程を以下に示す。本文中の順番とはやや異なる部分もある。

- ・ 1 日目 8 時 30 分自宅出発、10 時 55 分羽田空港発 JAL 便で 12 時 50 分福岡空港着
タクシーで博多港に移動し、高速船にて壱岐の郷ノ浦港に入港
観光バスにて黒埼砲台跡、猿岩を見学し、国民宿舎壱岐島荘に到着
- ・ 2 日目 8 時 30 分宿出発、月読神社参拝、左京鼻、はらほげ地蔵を見物、
原の辻一支国王都復元公園を見学、郷ノ浦港からフェリーで対馬の巖原港に入港、
万松院見学、ふれあい処つしま、市民交流センターに立ち寄り
東横イン対馬巖原にチェックイン、近くの万松閣にて夕食
- ・ 3 日目 8 時 40 分ホテル出発、観光バスにて和多都美神社参拝、烏帽子岳展望台見物
スーパーマーケットに立ち寄り、対馬やまねこ空港から ANA 便で福岡乗り継ぎ
16 時に羽田空港着

全て含めた費用は一人当たり約 5 万 2 千円になった。福岡到着時に GOTO 地域クーポンを 2 人分 22 枚（22000 円）を受け取り、全てを使い切った。この地域クーポンの分を差し引けば、1 人当たり約 4 万 1 千円になる。

- ・ 阪急交通社に払い込んだパックスツアー総額 99320 円（2 人分）
- ・ 羽田空港までの交通費 横浜-羽田空港往復 1456 円（2 人分）
- ・ 昼食（昼食はパックスツアー料金に入っていない）
 - 1 日目 羽田空港内の吉野家で昼食 1271 円（2 人分）
（この羽田空港内の吉野家はお勧めで、早く安く朝から夜まで利用できる）
 - 2 日目 おにぎりと飲み物（GOTO 地域クーポン利用）
 - 3 日目 弁当（GOTO 地域クーポン利用）
- ・ 土産その他飲み物等は全て GOTO の地域クーポンを利用し、ただしクーポンは釣りが出ないので利用時に端数を負担し、2 人で約 2000 円。